

芥川龍之介 夏目漱石宛書簡(昭和女子大学図書館蔵)について

―「芋粥」「猿」の評価をめぐって―

平 野 晶 子

一、はじめに

夏目漱石から芥川龍之介に宛てられた書簡は、現在のところ五通が確認され、各種の『漱石全集』に収められている。すべて一九一六(大正五)年のもので、一通は二月に東京田端の芥川宅へ芥川宛に、続く三通は八月下旬から九月初めにかけて、芥川と友人久米正雄がともに夏を過ごしていた千葉県一の宮海岸の旅館へ芥川と久米の両者宛に、そして五通目は同じく一の宮海岸へ芥川宛に書かれたものである。

「あゝいふものを是から二十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます」(二月十九日)、「然し無暗にあせつては不可ません。たゞ牛のやうに図々しく進んで行くのが大事です。」(八月二十一日)、「牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すではありません。」(八月二十四日)など、師から弟子に贈られた重要な意味深い言葉として、その文面が何度も引用される、いわば有名なこれらの手紙、とくに一の宮海岸に四度にわたって送られた手紙には、やり取りの相手たる芥川(と久米)の複数の書簡の存在が当然想像さ

れていた。^(注1)しかし、現在最新の『芥川龍之介全集』(岩波書店 一九九六〜一九九八)に挙げられているのは、漱石の八月二十四日付書簡の返事と思われる八月二十八日付のもののみである。この八月二十八日付書簡は^(注2)

『文壇名家書簡集』(新潮社 一九八・七・一八)掲載の「我々のボヘミアンライフを―芥川龍之介氏―」を「転載」したものであり、原書簡の所在は確認されていないこととなっている。^(注3)

ところが、昭和女子大学図書館(近代文庫)に、この八月二十八日付書簡および、全集未収録の八月二十二日、九月二日付の、芥川と久米による漱石宛書簡が所蔵されているのである。

この書簡は一九八三(昭和五八)年五月昭和女子大学で開催された日本英文学会第五十五回大会において、「外国文学関係文学者遺墨展」の一資料として佐藤春夫、土井晩翠、坪内逍遙、上田敏、島村抱月、夏目漱石らの遺墨とともに公開され、さらに同年八月一日発行の「学苑」五二四号に、「敏・漱石・龍之介・正雄の未刊書簡―日本英文学会第五十五回大会 外国文学関係文学者遺墨展資料―」として翻刻された。その際、八月二十八日付の芥川書簡は『芥川龍之介全集』に収録されているとの理由で「省略」され、^(注4)八月二十二日の芥川・久米書簡、八月二十八日の久米書簡、九

月二日の芥川・久米書簡の五通が発表されている。つまり、これらの書簡は、展示により公開され、翻刻として活字化されながらも、なぜか多くの認知を受けることなく忘れられ、今日に至った、ということになる。^(注5)

有名な漱石書簡の往信であり復信であるこれらの書簡からは、大正五年夏の芥川・久米の一の宮での生活が窺い知れるばかりでなく、漱石の言葉や作品評に対する考え、執筆直後の作品に対する思いなど、新進作家の言として注目される記述が数多く含まれている。本稿では、まず、これらの書簡の書かれた状況を改めて確認し、とくに芥川作品「芋粥」「新小説」第二十一号第九号 一九二六・九、「猿」〔「新思潮」第一年第七号 一九二六・九〕をめぐる漱石と芥川のやり取りに注目し、「芋粥」執筆時の芥川状況や「猿」の評価を考えていきたい。

二、「芋粥」「猿」をめぐる

I 往復書簡の書かれた状況

一九一五（大正四）年十一月、一高時代の先輩すでに漱石門下生であった林原（旧姓岡田）耕三の紹介で、芥川と久米は初めて漱石を訪問し、以後漱石山房の木曜会に熱心に参加するようになった。翌年創刊された第四次「新思潮」創刊号（一九一六・二）に発表された芥川の「鼻」を、漱石が「あなたのものは大変面白いと思ひます」と好意的に評価したのが二月十九日付芥川宛書簡のことであり、それが芥川の作家的出発に決定的な影響を与えたことなど、この頃の経緯はすでに多くの先行研究によって明らかにされ、論じられてきている。

この年満二十四歳の芥川は、この時点では、大学の同人誌である「新思

潮」（第三次・第四次）や、東京帝大文学部の関係者の会である帝国文学会の雑誌「帝国文学」に小説作品を発表していた小説家の卵に過ぎなかった。

しかし七月の大学卒業を経て迎えた八月、一日に「新小説」という「一流の文芸雑誌」^(注6)に初めて発表する作品「芋粥」を起筆。九日にはその「一」

十二枚を書き、十六日に脱稿。翌日、出来栄への自信と不安を抱えながら、久米とともに出かけたのが、千葉県長生郡一の宮町（現、一宮町）の海岸の旅館、一宮館であった。「ねまきも、おきまきも一つで、ごろ／＼してゐます。来る時に二人とも時計を忘れたので、何時に起きて何時に寝るのだから、我々にはさっぱりわかりません」「海へは、雨さへふつてゐなければ、何事を措いてもはひります」^(注7)（八月二十八日付芥川書簡）という、自由気ままな「ボヘミアンライフ」の日々に、漱石からの四通の書簡が届き、これに対して三通の漱石宛書簡が発信されたことが、『漱石全集』『芥川龍之介全集』そして昭和女子大学所蔵の書簡によって確認できる。

ただし、確認されているこの間の最初の漱石書簡（八月二十一日付）に、「あなたがたから端書がきたから奮発して此手紙を上げます」とあり、実際にはこれ以前にもう一通、芥川・久米から出された「端書」が存在したことがわかる。^(注8) また関口安義氏が、「八月末には二人の名で、漱石に一の宮名産のカマスの干物を送っている」ことを指摘しているが、それについては九月二日付の芥川書簡冒頭に「昨日 先生の所へ干物をさしあげました」に始まる長い「干物の因縁」が綴られている。干物とともに俳句も送られたことが分かり、それを書簡と数えるならば、九月一日付でさらにもう一通、芥川・久米からの通信が存在したことになる。^(注9)

以上を総合すると、二人が一の宮にやってきた八月十七日から、帰京した九月二日までの半月ほどの時間に、漱石との間に以下のように書簡が行

き来したことになる。

①八月二十一日(月) 以前 芥川龍之介・久米正雄より 漱石宛

(はがき。未確認)

②八月二十一日(月) 漱石より 久米正雄・芥川龍之介宛

③八月二十二日(火) 芥川龍之介・久米正雄より 漱石宛

(昭和女子大学図書館蔵 『芥川龍之介全集』未収録)

④八月二十四日(木) 漱石より 久米正雄・芥川龍之介宛

⑤八月二十八日(月) 芥川龍之介・久米正雄より 漱石宛

(昭和女子大学図書館蔵 芥川書簡は『文壇名家書簡集』および『芥川龍之介全集』所収)

⑥九月 一日(金) 漱石より 久米正雄・芥川龍之介宛

(昭和女子大学図書館蔵)

⑦九月 一日(金) 芥川龍之介・久米正雄より 漱石宛

(カマスの干物に俳句を添えたもの。未確認)

⑧九月 二日(土) 芥川龍之介・久米正雄より 漱石宛

(昭和女子大学図書館蔵 『芥川龍之介全集』未収録 久米書簡は『文壇名家書簡集』所収)

⑨九月 二日(土) 漱石より 芥川龍之介宛

すでに翻刻済みのため、全集未収録の③と⑧の芥川書簡の全文を、ここで改めて挙げることはしない。本稿では③と⑧にみられる、芥川の、自作についての言、特に「芋粥」と「猿」についての記述を取り上げてゆく。

以下、書簡の引用には右記に付した①～⑨の番号をもって日付、発信者を示す。

II 「芋粥」執筆をめぐる記述

書簡④と⑨で、漱石は「芋粥」について述べている。「新思潮」九月号発売前の④では激励し、発売後の⑨では細かい批評と注意で書簡のすべてを埋めている。その冒頭は「あゝさうだ。／＼。芥川君の作物の事だ。大変神経を悩ませてゐるやうに久米君も自分も書いて来たが」(書簡④)「啓只今芋粥を読みました君が心配してゐる事を知つてゐる故一寸感想を書いてあげます」(書簡⑨)で始まるが、それに続く「芋粥」の評ほどには注目されてこなかったこの「大変神経を悩ませてゐる」「心配してゐる」様子がどんなものであったかが、書簡③には詳しく記されている。漱石が「芋粥」読前、読後の二度にわたって、情にあふれた激励と批評の文を与えるには、芥川の相当の「心配」が漱石に伝えられているはずであった。それを示す記述がみられる。^(注10)

昨日 新小説の校正が来ました。校正でだけ見た所では、どうも失敗の作らしいので 大にまるつてしまつて居ります。私は いつでも一月ばかりたつた後でないと 自分の書いたものが どの位まで行つてゐるのかわかりません。さうすると 今 まるつてゐると云ふのが 矛盾のやうですけれど まだ失敗したのだから どうだかわからない わからないと思ひながら それでも どうも失敗したらしいので まるつてしまふのです。 実際 校正しながらも 後から後から 気になる所が出て来るので 何度 赤インキの筆を抛り出して ね

ころんでしまったかわかりません。久米が そばから大に鼓舞してくれるのですが 気になるのは 人の評価でなくて 自分の評価ですから 困ります。尤も 自分の評価も 全然 人の評価に左右されない事はなささうですが。

くだらない事を 長く書きました。何だかこのまゐつてゐる心もちを 先生へ訴へたいやうな気がしたからです。 さうでも さして頂かなければ 妙に気がめいつて やりきれません。

しけだものですから 宿屋は 大抵毎日 芋ばかり食はせます。小説も芋粥ですから 私は 芋に祟られてゐるのでせう。

実に書簡全体の半分近い分量を占める訴えである。これ以外の部分が旅館での生活の様子の報告に終始していることを考えると、書簡③の目的は結局、この「新小説の校正」にまつわる鬱屈晴らしであったと考えてよい。しかしここには、作品の不出来に真に困窮しているような切迫した様子はあまり見て取れない。一流文芸誌へのデビューの不安を綴っているように、その裏に、それがかなった自己の実力への自信、「気になるのは 人の評価でなくて 自分の評価ですから」という自負が窺える。その自負の重さに耐えかねながら、実はその自負を担保に、大いなる師である漱石に甘えているようでもある。こうした芥川の複雑さは、同封された久米の書簡を照らし合わせることによって、よりいっそう明らかにになる。

此頃芥川は新小説へ出した小説に不安を感じ出して、「参つた、参つた」と云ひつゞけて居ります。僕がいくら慰め（少し語弊があります）が）たつて只「参つた、参つた。」と云つてるばかりです。それが全

然自分にばかり対して感じる不安かと云ふと、まんざらさうでもないらしく、まづ対外的な意味も幾分含んだ、ひどく複雑^{マズ}したらしいものなので、僕が他人が見たらまづお座なりに近いかも知れない言葉で何とか云つても、回復すべき道はないのです。こんな時、僕が何と云つた処で芥川の不安はなほらないのでせうが、僕も只うつちやつて置くわけに行かないから、効果がないと知りつゝ慰めなくちやならない、ごく苦しい立場にゐます。そこへ来た先生のお手紙は彼の心持を引立てるのに、今重大な効目をあらはしました。その点だけでも御礼を申し上げなくてはなりません。（中略）

彼の小説は、僕の見た処、決して悪くはないのです。悪い処か、いろ／＼な美点は、それを彼の作としても傑作にしてゐます。心配することはないので。尤もそれに心配することは彼の芸術的良心の鋭さを証明するのですが、心配する甲斐のない心配に囚はれてゐるのは決していゝ事ぢやなからうと思ひます。併しこれも一時の心の状態で、やがて又非常な元氣になるでせう。（中略）

と云ふと彼が全然しよげてゐるやうですが、さうでもないのです。つまり彼の云ふ如く、絶対のものには飽く迄謙遜であるが、相対のものにはさうであり得ないのです。処が一の宮には其相対的なものが沢山ないので、不遜になりうる機会が少ないのだらうと僕は解釈して居ります。

芥川が「気になるのは 人の評価でなくて 自分の評価」と述べた部分を、久米は「絶対のものには飽く迄謙遜であるが、相対のものにはさうであり得ない」と言い換えている。一見して、久米の書簡が芥川のものより

客観的な視点を持ち、いわば大人びている。大島真木氏は芥川全集収録の書簡⑤について、「まるで少年の書いた手紙のようなナイーブなもの」「ここに見られる感情は、尊敬する作家に対するものというよりはむしろ恋人に対する感情に近い」とし、「この手紙を書きながら芥川はとても幸福だったのだろう」と述べているが、書簡③においても状況は同じであると考えてよいと思われる。久米の、漱石を敬愛しながらも自分の思いを率直かつ冷静に伝えようとする筆に比べ、芥川の文章は、「芋粥」の成否という自己の目前の大問題で手一杯であるにせよ、あまりに幼い。また紅野敏郎氏は、やはり書簡⑤について、「木曜会メンバーとしての親愛の念がよくにじみ出ているが、「明暗」を書き悩んでいた漱石の胸奥を、凝視する眼の輝きはまったく表われていない」と指摘しているが、これについても書簡③において同様の状況がみられる。漱石が書簡②で「僕は不相変『明暗』を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快樂、器械的、此三つをかねてゐます」とし、「百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので」^(注13)午後には漢詩を作っているとして自作の七言絶句を記していることに対して、③の久米書簡では「明暗」や漱石の漢詩に触れた^(注14)記述で応じているのに対し、芥川書簡は何の反応もしていないのである。

Ⅲ 「猿」評とそれについての反応

書簡⑥で、漱石は「昨日新思潮を読んだ感想」を記している。この「新思潮」とは九月一日発行の「新思潮」第一年第七号のことで、芥川「猿」「創作」、久米「艶書」、菊池寛「身投救助業」、松岡譲「揺れ地蔵」が発表されていた。「松岡君のも菊池君のも面白い」としながらも、とくに芥川と久米の作品について詳しい評を展開している。ここではそのうち、芥

川の「猿」についての評を取り上げたいと思う。その前に、「猿」の内容を紹介しておきたい。

物語は海軍士官候補生の「私」の一人称で語られる。

「私」が乗艦していた軍艦で、横須賀入港時に盗難事件が発覚し、総員の身体、持ち物検査が行われる。仲間と一緒に検査を進めるうち、候補生仲間の牧田が盗品を発見、犯人が奈良島という信号兵であることが明らかになるが、その奈良島が姿を消した。軍艦では窃盗犯人が石炭庫の中で縊死する例があり、将校、とくに副長が顔色を変えて心配する様子に、「私」たちは軽蔑を感じる。以前砲術長の飼っていた猿が盗みをし、追いかけて捕まえたものの、結局砲術長自身が「絶食の懲罰」を破りその猿に餌を与えてしまったことを思い出し、「一種の愉快な興奮に駆られ」ながら、奈良島の艦内捜索に臨む。下甲板の石炭庫の積入口に人間の上半身が出ているのを見つけた「私」は、「待つてゐた猟師が、獲物の来るのを見た時のやうな心持ち」でその肩をおさえたが、「静に、私の顔を見上げ」た奈良島の「悪魔でも、一目見たら、泣くかと思ふやうな」「恐しい表情」が、「心にある何物かを、稲妻のやうに、たゞき壊したのを感じ」る。さらに奈良島の「面目ごさいません」という言葉に、「私たちより大きい、何物かの前に首がさげた」と感じ、「私自身が捕へられた犯人のやうに」石炭庫の前に立ち尽くす。奈良島は過酷な懲罰を受けることになった。その日の夕暮れ、牧田に「猿を生捕つたのは、大手柄だな」と言われ、「奈良島は人間だ。猿ぢやあない。」と答えた「私」は、「奈良島の生死を気づかした副長の狼狽した容子を、なつかしく思ひ返」し、奈良島を猿扱いした自分たちの「莫迦さかげん」を恥じる。「猿は懲罰をゆるされても、人間はゆるされませんから」という言葉で、一人称の語りが閉じる。

漱石は書簡⑥で、まず芥川と久米の作品が「両方共一種の倫理観」というポイントを共有しており、「其倫理観は何方もう心持のするものです」としたうえで、この「猿」について次のように述べている。

芥川君の方では、石炭庫へ入る所を後から抱きとめる時の光景が物足りない。それを解剖的な筆致で補つてあるが、その解剖的な説明が、僕にはひし／＼と逼らない。無理とも下手とも思はないが、現実感が書いてある通りの所まで伴つて行かない。然しあすこが第一大切な所である事は作者に解つてゐるから、あゝ骨を折つてあるに違ひないと、(読者が君の思ふ所迄引張られて行けないといふ点に於て)、君は多少無理な努力を必要上遣つた、若くは前後の關係上遣らせられた事にはしませんか。僕は君の意見を聴くのです、何うですか。それから最後の「落ち」又は落所はあゝで面白い又新しい、さうして一篇に響くには違ひないが、如何せん、照応する双方の側が、文句として又は意味として貧弱過ぎる。と云ふのは expressive であり乍ら力が足りないといふのです。副長に対スル倫理的批評の変化、それが骨子であるのに、誤解の方も正解の方も(叙述が簡単な為にも累をなしてゐる)強調されてゐない、ピンと頭へ来ない。それが欠点ぢやないかと思ひます。

関口安義氏はこの評について、「実に親切なコメント」とし、「ほめるばかりでなく」「はつきりとテキストの弱点を指摘する。適評である」^(注15)としているが、鷺只雄氏は別の見解を述べている。^(注16) 鷺氏はまず、書簡⑨の「芋粥」評を取り上げ、「漱石が芥川に見ているものは、『新しい材料』を発見

し、それを自在に駆使して『要領よく整え得る文章』の才能と一種古典的な完成を遂げている作品の『上品な趣』を感じさせる物語作家としての非凡な才能」であるとし、「そのように予見された質の才能の場合、必要な助言は表現の技術の問題である筈」と述べて、漱石の芥川批評がテーマに関わるものより技術論に傾くのはそのためだとする。そのうえで、「猿」は「人間存在の重さの発見、認識あるいは倫理の覚醒をテーマにしていると言つてよ」く、その骨子は「『水兵に対する見方の変化』と云うべきではあつても、『副長に対スル倫理的批評の変化』ではない」、石炭庫のシーンの評は的確だが、最後の「落ち」についての評は、「末尾の『落ち』に余りにこだわりすぎた結果の誤読が言い過ぎなら筆の走り過ぎ」と、漱石評を批判し、「鼻」を高く評価することで「芥川の作品の最初の理解者の役を果した」漱石にあつても、「必ずしもそれ以後の作品の『正確な理解』を保証するものではないのではないか、むしろそこには誤解ないしズレがあるのではないか」と述べている。^(注17)

二氏の論は書簡⑧を見ることなく書かれたものであり、それぞれの見解の当否は、この書簡の検討を経たうえでなされるべきであらう。芥川は書簡⑧において、書簡⑥の漱石の批評に対して以下のように綴っている。

「猿」は もう少し自信があります。石炭庫の所は 書いてゐる時の心もちから云ふと 後から抱きとめる所までは 或充実した感じ^マて書けましたが 信号兵の名をよぶ所からあとは それが稀薄になるのを感じました。さうして その稀薄さが出るのを惧れたので 二三度そこだけ書き直して見ました。つまり先生はその稀薄さを看破しておしまひになつた事になるのでせう。僕は さう云ふ意味で あすこ

に 無理な力があるのを認めます。やはり実感の空疎なのが だめなのだと しみじみ思いました。技巧では 僕として 出来るだけの事をした気であるのですが。

「落ち」も 少し口惜しいが 先生の非難なすつた事を 認めざるを得ません。「口惜しいが」と云ふより 「口惜しい程 明瞭に一々指摘してあると思つた」と云ふ方が 適切です あれもやはり叙述の簡単が累をなしてゐるよりは 主として 照応する二者の後にある主観が ふわついてゐるからでせう。書く時はふわつかないつもりで書いているのですか出来上がつたものを見ると ふわついてゐるのだから 困ります。

創作のプロセスに 終始リファアしてゆく批評は 先生より外に僕たちは 求められません。(僕たちがえらいから 先生以外の人の批評を求めないと云ふ意味ではありません。外の人たちの批評に さういふ痛切な「僕たちに」所がないのです。)ですから これからもご遠慮なく して頂きたいと思ひます。少し位 手痛く参らせて下さつても 恐れません。反て 勇気が出ます。

この書簡の芥川は、書簡③や⑤に比べると、かなり落ち着いてはいるが、漱石の言葉が芥川にとって絶対的である点は変わらない。信号兵を捕まえるシーンについても、鷺氏が漱石評に異議を唱えた「落ち」の部分についても、「看破しておしまひになつた」「口惜しい程 明瞭に一々指摘してある」とあっさり漱石に兜を脱いでいる。そしてその原因としてそれぞれ「実感の空疎」なこと、「叙述の簡単が累をなしてゐるよりは 主として照応する二者の後にある主観が ふわついてゐるから」であることを挙げ

ている。とくに後者の「二者の後ろにある主観」とは、つまりはテーマのことであり、そこが不安定なために、「落ち」が効果的に作用しないのだと認めている。これは、漱石が作品の骨子をとらえ違えているという鷺氏の意見と、実際の芥川みずからの見解が隔たっていることを示している。たとえ芥川がどのようなタイプの作家であろうと、作家間のやり取りで問題になるのは常に「表現の技術の問題」なのではないだろうか。作家である芥川の目は作品の鑑賞ではなく構成に向けられており、もっといえば「主観」そのものより「主観が ふわついてゐる」こと、それが作品の出来に及ぼす影響こそが、このときの芥川にとって問題だったのではないだろうか。

さらに注目されるのは、「創作のプロセスに 終始リファアしてゆく批評は 先生より外に 僕たちは 求められません。」という一節である。これは、芥川にとって漱石が、作品の理解者としてよりも、創作の過程に終始参照され、創作そのものに帰してゆく批評の提供者として無二の存在であったということをはっきりと物語っている。新進作家である芥川にとっては、自分の作品を理解してくれる師にもまして、自らが作品を作り上げていく際に、未熟な腕の助けとなる道しるべとしての師の存在が重要だったのではないだろうか。

三、結 び

漱石の芥川宛書簡五通と、『芥川龍之介全集』収録の芥川の漱石宛書簡一通の存在から、すでに論考が重ねられ、推測されていたことではあったが、全集未収録の二通の漱石宛芥川書簡の、芥川の初期作品「芋粥」「猿」

についての記述を辿ってみることで、これまで顕在化しなかった「芋粥」執筆時の状況や、「猿」の自己評価の様相（実態）を窺い知ることができた。それと同時に、新進作家芥川における師漱石の存在のありようが、わずかながら確認できたのではないかと思う。漱石宛の芥川書簡の中の漱石は、芥川自身が少年のように心を開いて、時には甘えもし、なにより実践的な創作上の指導を受けることができる、なつかしい「先生」の姿である。自分の未来の明るさのみをまっすぐに見つめることができたこの時点の芥川は、「牛」になれ、文壇を相手にするな、人を押せという漱石の真意を十分に受け止めているとは言い難い^(注18)状態だった。この手放しの、無邪気、無防備ともいえる芥川の漱石に対するありようは、後年「あの頃の自分の事」^(「中央公論」第三十四年第一号 一九一九・一)に文字通りこのころのこととして描かれている内容や、「或阿呆の一生」^(「改造」第九卷第十号 一九二七・一一)に記されている記述とは、大きくかけはなれているように思われる。

現に僕は二三度行つて、なんだか夏目さんにヒプノタイズされさうな、——たとへばだ、僕が小説を発表した場合に、もし夏目さんが悪いと云つたら、それがどんな傑作でも悪いと自分でも信じさうな、物騒な気がし出したから、この二三週間は行くのを見合せてゐる。人格的なマグネティズムとでも云ふかな。兎に角さう云ふ危険性のあるものが、あの人の体からは何時でも放射してゐるんだ。だから夏目さんなんぞに接近するのは、一概に好いとばかりは云へないと思ふ。我々は大人と行かなくつても、まあいろんな点で全然小供ちやなくなつてゐるから好いが、さもなくば、のつけにもうあの影響の捕虜にな

つて、自分自身の仕事にとりかかるだけの精神的自由を失つてしまふだらう。^(「あの頃の自分の事（削除分） 六」)^(注19)

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は巻煙草に火もつけずに歎びに近い苦しみを感じてゐた。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……^(「或阿呆の一生 十三 先生の死」)

漱石像が芥川の内部で、このような畏怖の対象に転じていったのはいつのことなのだろうか。その転換点を、漱石の、芥川にとっては早すぎる死^(注20)に置くことができるのではないかと考えている。なつかしく偉大な「先生」が姿を消し、その作品と思想だけが残されたとき、漱石は弟子芥川を導いてくれる存在から、作家芥川を脅かす存在に変わったのではないだろうか。饗庭孝男氏は「芥川には、漱石が『道草』で示したような、執拗な自己批判をつうじて、自己が、ほとんど精神的に接点をもたない人々の間で無限に相対化され、裸形となってゆく過程を、表現の上に、暗鬱な意志をもつて一つまた一つ構築してゆくという働きがなかった。芥川が他者の作品に、羨望をもって『詩的精神』を感じている分だけ、彼には作品が構造性をもたず、歌となり、現実を斜にかいなる逆説風のアフォリズムとなった^(注21)」と述べる。「暗鬱な意志をもって一つまた一つ構築していく」、超然とした牛の行き方は、ついに芥川の指針とならず、むしろ脅威となつていったのではないだろうか。

注

1. 例えば関口安義氏は『芥川龍之介全集』第十八巻 書簡Ⅱ（岩波書店 一九九七・四・八）の「注解」において、『漱石全集』所収の書簡から芥川の漱石宛書簡を推定し、確認されている一通の他に「実際にはもう二通、もしくは三通は存在したはず」としていた。

2. 漱石八月二十四日付の書簡には、芥川が翌九月の「新小説」に執筆した「芋粥」について、「それは受け合います。君の作物はちゃんと手腕がきまつてゐるのです。決してある程度以下には書かうとしても書けないからです。（中略）大丈夫です。此予言が適中するかしないかはもう一週間すると分ります。適中したら僕に礼をお云ひなさい。外れたら僕があやまります。」とあるが、四日後の日付のこの芥川書簡には、「いよいよ九月の一日が近づくので、あんまりいゝ気はしません。先生にあやまつて頂くよりは、御礼を云ふやうになる事を祈つてゐます。」とあり、漱石の二十四日付の書簡を得ての返信であることがわかる。

3. 『文壇名家書簡集』（新潮社 一九一八・七・一八）は当時の著名作家の書簡を収録したもの。「例言」には、「一、現代文壇の諸家が実際に往復したる書簡を集めて、此の一巻を編む。総て九十有三家、百五十通。現文壇の表裏種々の消息此の一巻に窺ふことを得ん。一、収むるところ、皆未だ曾て公にせられたること無かりしものゝみ也。この書簡を貸与し、はた、公表を諾せられたる諸家に対して、こゝに深き感謝の意を表す。」とある。関口安義氏はこの八月二十八日付書簡や、この前後に存在したはずの漱石宛書簡について「夏目家では、そのころ無名だった芥川や久米の手紙を保存するわけがなく、一切散逸したものと思われる」（『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房 一九九三・三・二〇）と推測しているが、例言の「一、書簡は、予め、その筆者に就いて承諾を求めたるは勿論なるも、中に二三、事後に於て寛恕を請ひたる向きもあり。事情已むを得ざるものありしによる。」が真実ならば、漱石の死

後一年以上の一九一八（大正七）年前後の時期までこの書簡はなんらかの形で「保存」され、芥川自身がこの書簡を書簡集の出版後に確認していたことになる。なおこの『文壇名家書簡集』には、久米正雄の漱石宛九月二日付書簡も「省みて『微苦笑』を禁じ得ません―久米正雄氏―」として収録されている。

4. 確認したところ、原書簡と『文壇名家書簡集』収録の書簡「我々のボヘミアンライフを―芥川龍之介氏―」には、内容に影響するような大きな相違はないが、多少の語句（文字）の相違や、原書簡では読点がわりに用いられている一字空きの部分がすべて読点となっている、改行がなされていない部分がある、踊り字でない部分が踊り字となっている、など、細かい相違が数多く見られる。原書簡からの翻刻が今一度必要と思われる。

5. なお芥川の九月二日付書簡は、同じく昭和女子大学図書館（近代文庫）蔵の芥川・久米宛夏目漱石書簡（大正五年九月一日付）とともに、二〇〇二（平成一四）年五月、昭和女子大学光葉博物館で開催された『近代文学研究叢書』完結記念展示会において展示された。

6. 関口安義『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房 一九九三・三・二〇）

7. 本稿では芥川の八月二十八日付書簡の引用は、原書簡ではなく、『文壇名家書簡集』を「転載」した『芥川龍之介全集』第一八巻（岩波書店 一九九七・四・八）による。

8. この「端書」は昭和女子大学図書館では所蔵しておらず、本稿作成時点でも不明のままである。

9. 注6に同じ。また関口氏は、「端書」に続く二通目を、八月二十一、二日ごろと推定していたが、それにあたるのが二十二日付芥川・久米書簡であろう。

10. 以下、全集未収録の芥川書簡（③および⑧）の引用は、「敏・漱石・龍之介・正雄の未刊書簡―日本文学学会第五十五回大会 外国文学関係文学者遺墨展資料―」（『学苑』五二四号 一九八三・八・一）による。文中の空白（一字

空き)や改行などは、ほぼ原書簡とおりの体裁である。

11. 大島真木「芥川龍之介と夏目漱石―モーパッサンの評価をめぐる―」(『比較文学研究』三三三号 一九七八・六)

12. 紅野敏郎「芥川龍之介の手紙―塚本文・夏目漱石・恒藤恭宛をめぐる―」

(『国文学』四五卷二三号 二〇〇〇・一一・一〇)

13. 漱石「明暗」は「東京朝日新聞」に大正五年五月二十六日(『大阪朝日新聞』には二十七日)より連載開始、書簡②の書かれた八月二十一日には連載第八十三回が掲載。

14. 久米書簡には「『明暗』も(中略)東京へ置いて来ましたが(中略)昨日偶然此処の交友倶楽部といふ玉突場で、文士君がお延を尋ねて来て、話してゐる処を一回読みました。」「御漢詩、私にも解つて面白く拝見しました。私も作りはしませんが、拝見するだけなら、拝見ができます」などの記述がある。久米は②の漱石書簡で印象的な最後のパラグラフ「私はこんな長い手紙をたゞ書くのです。永い日が何時迄もつゞいて何うしても日が暮れないといふ証拠に書くのです。さういふ心持の中に入つてゐる自分を君等に紹介する為に書くのです。夫からさういふ心持でゐる事を自分で味つて見るために書くのです。日は長いのです。四方は蟬の声で埋つてゐます」もきちんと受け止め、「永い日を持つておいでになる先生を、よく云へばお紛らせ申し、悪く云へばお悩ませ申さうと」と書簡冒頭で記している。

15. 注6に同じ。

16. 鷺只雄「芥川と漱石―漱石書簡の評をめぐつての断章―」(都留文科大「国文学論考」九号 一九七三・三・一)引用にあたり、傍点は省略した。

17. 「猿」評には他に小宮豊隆「今月読んだ小説、戯曲 三」(『時事新報』一九一六・九・一九)、江口渙「芥川君の作品 中」(『東京日日新聞』一九一七・六・二九)、清田文武「芥川龍之介『猿』の考察―鷗外訳『猿』との比較を中心に―」(『新潟大学教育学部紀要第一四巻 人文・社会科学編』一九七三・三・

二六)、渡邊正彦「芥川龍之介『猿』論並びに材原考―ドストエフスキー『白痴』との関係―」(『群馬近代文学研究』一二号 一九八七・三・三一)等があるが、いずれも漱石書簡の「猿」評を深く探ったものではない。漱石書簡を考察した論には山田淳「芥川にとって漱石とは―五通の漱石の芥川書簡を中心として―」(『芥川の宿命』(『東海大学』「湘南文学」第二九号 一九九五・三・二五)等がある。

18. 注12に同じ。

19. 初出にあつた第二章と第六章は、『影燈籠』(春陽堂 一九二〇・一・二八)収録の際削除されている。

20. 漱石は書簡のやり取りからわずか三か月後の一九一六(大正五)年十二月九日に死去している。

21. 饗庭孝男「場所の論理―夏目漱石と芥川龍之介」(『季刊芸術』第四一号 一九七七・四・一)、『私』と心性の基盤―夏目漱石と芥川龍之介』として『批評と表現 近代日本文学の「私」』文芸春秋 一九七九・六・一〇に収録)

※芥川書簡および作品の引用は岩波書店版『芥川龍之介全集』第一巻(一九九五・一一・八)、同第四巻(一九九六・二・八)、同第十六巻(一九九七・二・一〇)、同第十八巻(一九九七・四・八)によつた。漱石書簡の引用は『漱石全集』第二十四巻(岩波書店 一九九七・二・二二)に、また『芥川龍之介全集』未収録の芥川書簡および久米正雄書簡の引用は「敏・漱石・龍之介・正雄の未刊書簡―日本文学会第五十五回大会 外国文学関係文学者遺墨展資料―」(『学苑』五二四号 一九八三・八・一 文責 佐々木満子)によつた。引用文中の書体は新字に改め、ルビ等は適宜省略した。

※芥川・久米書簡の閲覧を許可された昭和女子大学図書館に御礼申し上げます。